九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第11回研究大会公開シンポジウム(概要報告)「福岡・アンビシャス運動のこれまでとこれから」

正平, 辰男
純真短期大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/26721

出版情報：生活体験学習研究. 11, pp.73-75, 2011-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

第11回研究大会
公開シンポジウム（概要報告）
「福岡・アンビシャス運動のこれまでとこれから」

日　　時：2010年１月24日(日)　　14：00～16：30

会　　場：九州産業大学

シンポジスト：古　賀　倫　嗣（熊本大学　教授）

藤　田　弘　毅（福岡県和ごま競技普及協会　会長）

相　戸　晴　子（NPO 法人子育て市民活動サポート Will　代表理事）

横　山　正　幸（福岡教育大学　名誉教授）

司　　会：正　平　辰　男（純真短期大学　教授）

日本生活体験学習学会誌　第11号　73－75（2011）

公開シンポジウム
「福岡・アンビシャス運動のこれまでとこれから」

１．はじめに
－「アンビシャス運動の理念と展開」を足がかりに－

日本生活体験学習学会第11回研究大会が九州産業大学（福岡市東区）で開催されるにあたり、このシンポジウムでは福岡県で展開されてきたアンビシャス運動を題材として取り上げた。シンポジムテーマを研究大会要項において次のように位置づけた。「本シンポジムでは、福岡県の『青少年アンビシャス運動』の社会的な理念と地域ぐるみの展開過程を手がかりに、『地域で子どもを育てる』ことの現代的な課題と社会的な意義を問うことを目的とするものです。地域の教育力と家庭の教育力は『子育て支援の両輪』です。『家庭教育』の内実が問われているなか、『地域』ができること、できないこと、そしてしなければならないこと、そうした社会的な課題にこたえるシンポジムにしたいと考えています。」

シンポジムに先立って、この運動の立ち上げから現在まで関わりを持ち続けている横山正幸さん（本学会理事・福岡教育大学名誉教授）が、「アンビシャス運動の理念と展開」と題する基調講演を行い、アンビシャス運動の展開概要を次のように紹介した。具体的な運動が始まったのが、2001年４月である。2006年に運動全体の成果を検証する調査と検討がなされて、間もなく10年になる取り組みである。従来の青少年健全育成運動が、どちらかというと後追い型の運動であったのに対してプラス志向の青少年健全育成運動であるところに、この運動の最大の特徴がある。「アンビシャス運動100人委員会」を組織して広く県民の意見を集約し、運動の理念と方策を構築した。運動の３原則を、「誉めて伸ばそう」「自主的参加」「交流・評価」の３つとし、「子どもがアンビシャスになるための12の提案」を示した。事業の核は、地域ぐるみで子どもを育てる「アンビシャス広場」の開設であり、ボランティアによる読書活動も推進し、事業と事業を結ぶ「地域連携事業」も始まった。2006年の秋に「アンビシャス運動合同検討会議」が設置されて、「第２期への提言」がまとめられ、その中でこれまでの「12の提案」を７項目に整理統合した。合わせて①参加団体の数2,000を目指す、②活動のネットワークをつくる、③子どもの自尊感情とコミュニケーション能力の向上を目指すことを目標として定めた。この運動があげた成果は大きいが、アンビシャスな子どもを育てることができたかという問に自信をもって答えることは難しい。子どもをとりまくマイナス要因に運動が押し戻されつつあるという思いを抱いているとして、運動の成果と課題を提示した。

シンポジウムの登壇者は、古賀倫嗣（のりつぐ）さん（熊本大学）、藤田弘毅さん（福岡県和ごま競技普及協会）、相戸晴子さん（NPO 法人子育て市民活動サポートWill）、横山正幸さんの４人、司会は正平辰男（純真短期大学）が担当した。

２．子どもの生活体験実態と地域実践

古賀倫嗣（のりつぐ）さん（熊本大学教授）は、「青少年の生活と意識に関する調査」（2000年）結果の小学６年生の実態から10年前の調査に比べて、わずかに、家族との団らんについて10％の改善がみられた以外は、子どもの健康状態、睡眠時間、自律起床などの自立度、保護者との会話、家庭生活の満足度のいずれもがマイナスの数値がはっきりと出ている。福岡県の「子ども問題」について、自らも一部の調査に関わった経緯なども含めて、「３年後の成り行きが憂慮される」と警鐘を鳴らした。また、「福岡県における中学生の意識・行動調査」（2007年）によれば、家庭生活の満足度は過去の調査に比べて高い。しかし、家庭学習の時間は2002年の調査に比べて低下している。また、自尊感情の低い割合は、「いつも」「ときどき」を合わせると男子で半数に近く、女子では半数を超えている。悩みの相談相手がいない子どもの存在も気になる数値であるとした。そのうえで、地域と家庭の教育力の活性化に向けて２つの視点を提示した。①「だれが教育をになうべきか－子どもと家族・学校・地域の役割」（西日本新聞社、1979年）の原理論的な重要性を再確認することが必要、②「子どもの生活」をキーワードとする学社連携の推進が必要であるとした。具体的には、○「体験活動」重視、○「労働体験」「勤労体験」から「キャリア教育」へ、○生活体験プログラムと協調性・規範性・

耐性育成の課題を提示した。「だれが教育をになうべきか」の提案のポイント「地域に固有の教育力として考えられる社会規範や生活体験、及び社会集団は、次元を異にしながら相互に関連し、有機的一体的に作用するとき、はじめて教育力としての実効をおさめ得るものであろう。すなわち、地域における社会規範は子どもの生活体験の中に生活体験を通して生きて働き、生活体験は社会集団の意図的組織的働きかけによって調整され、充実強化されなければならない。」(７頁)

藤田弘毅さんは、太宰府市国分アンビシャス広場を開設してから９年目になるが、現在までの過程を披歴しながら課題と成果を示した。国分区は約2,000世帯、小学生350人の大きな自治区である。平成13年７月、国分アンビシャス広場を水曜日放課後と土曜日の午後開いた。さらに、土曜日の午前中にアンビシャス塾を開いた。この塾では小１～６年生の子どもたち30人を集めて、工作、読み聞かせ、英語教室などを実施した。この30人が核になってくれたので午後のアンビシャス広場において「子供社会づくり」ができると考えた。アンビシャス塾は盛会になったが、子供社会は誕生しなかった。アンビシャス広場でいろんな遊びを試して行き着いたのが「和ごま」だった。子どもたちの中に核をつくるために「ちびっこ指導員」の認定試験制度を作って、現在まで32名が合格した。「ちびっこ指導員」はこま遊びの中心になってはいるが指導はしない。「こまの団体戦」は、ちびっこ指導員２名がじゃんけんでこまのうまい子から順に選び２つのチームが編成されて壮絶な戦いが連続する。広場に来る子は思いっきり遊んでいる。地域でも戸外で遊ぶ子が多く見られるようになった。アンビシャス広場の波及効果といえる。アンビシャス広場８年の蓄積の過程で保護者からの感謝の言葉も聞かれるようになった。課題としてはアンビシャス広場の取り組みにおいてボランティアに負担がかかり過ぎていないか。ボランティアの負担軽減の方法を講じないと継続がむずかしくなるなどの課題を提起した。

相戸晴子さんは、自身の子育てを通して夫婦や家族（身内）だけでは解決できないことが多い現実に出会って、そこから、つながりあい活動や学習活動を組織化していくことによって多くの課題を解決することができたと振り返る。点よりも面を、個人の気づきに止めないで組織の気づきに広めていくことによって活動のうねりが作れるという。組織の運営は自転するしくみが重要で、周囲から回してもらう公転だけでは活動の主体は育たない。今どきの子どもたちについて、乳児の感性は本質的には変わらないが、幼児期以降になると、子どもの生活が一変するという。「道具」を用いた遊びが増えると、子どもの五感が視覚中心に変わってしまう。「道具」を使うことによって、極端に人間本来に備わっている感覚を鈍らせているように見える。相戸さん自身の調査でも、子どもの生活状況－「食」「睡眠」「人との関係」「メディア」等－が中学生の自尊感情の高低に影響をおよぼしているという結果が得られた。子育て市民活動の実践課題として次のような視点を示した。居場所づくりは大切だが、作ったその居場所を土台にして生活に必要なカリキュラムを組み入れていく実践をプログラム化していく必要がある。さらには通学合宿を例にひきながら、子どもの生活文化を支えるための体験の場や体験の時間を含んだプログラムをアンビシャス運動等に取り入れていく必要を提案した。子どもや保護者の位置づけについて、活動主体として活動の展開や継続を考える主体として成長していく、すなわち、子どもや保護者を取りまく周囲からいえば、主体として成長させていく視点が不可欠だと提示した。

３．子どもの生活体験を支える実践の成果と課題

以上の発言概要を補強発展させる形で次のような発言があった。藤田さんは、週二日の広場を年中やるのは大変といい、アンビシャス運動は通り一遍の運動じゃ盛り上がらないと取り組んだ立場から言う。同時に、「こま」の魅力で子どもは集まる、「こま」で自立した異年齢の子ども社会をつくり、その子ども社会の中で自立心を育んできた手応えを語った。相戸さんは、公民館にも行ったが居場所にはならなかった。しかし、保護者が集まれば答えは見つかると子育て市民活動の原点を語った。課題は、保護者の意見を聞き、保護者が企画に加わり、役割を分担するような活動が不可欠であり重要である。プログラムは大切だが、プログラムがあることで子どもの意欲やわくわく感がそがれるようなことではいけな

い。その意味ではノンプログラムの大切さも認識しておかなければならないという。古賀さんは、アンビシャス運動にできないことがあると指摘した。協調性、規範性、耐性を育てる課題があり、自律心を育てることが自尊心を育てることにつながっていくという。横山さんは、自尊感情の高い子の割合と生活実態の関係・小学生の場合（福岡県、2009）のデータを示して、自尊感情の高い子は、褒められた体験があり、授業で発言をし、友達が５人以上いて、外遊びを１時間以上して、10時までに就寝している生活体験の状態にあるとして、自尊感情と生活体験の関係性を指摘した。また、仮にアンビシャス運動を展開していなかったらと考えてみると、この運動の成果は大変に大きい。しかし、10年の積み重ねの中にはマンネリ化もないわけではない。課題としてアンビシャス広場における大人の関わり方が改善される必要があるだろうと課題を示した。

おわりに

以上の通りこのシンポジウムでは、古賀倫嗣（のりつぐ）さんは社会学に立場から、藤田弘毅さんはアンビシャス運動の実践者の立場から、相戸晴子さんは子育て市民活動の立場から、横山正幸さんはアンビシャス運動の立ち上げから現在まで関わりを持ち続けてきた立場から成果と課題を提示した。司会の正平からは時間の制約もあり「まとめ」の発言をしなかった。

【文責：正平　辰男】